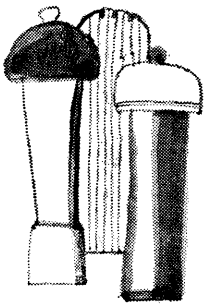
私の保育

――そこに「フーガ」を見る――

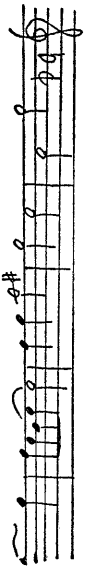
松沢孝博



一人の保育者として子ども達との付き合いを考える時、同僚が子ども達と接している様子や、実習生が新鮮な感覚で子どもと過している姿、又、保育後の彼等との話し合いは、私に色々な教えや励みを与えてくれる。それらを通してよく感ずる事は、保育という子ども達との付き合いの中に「フーガ」的要素があるのではないかということである。それは、ここで述べることができる程明確にとらえられているわけではなく、どちらかという〝感じている〟ぐらいに過ぎないものだ。けれども、時に私が子どもとの付き合いに、どうしたらよいか困っている時など、保育が「フーガ」として流れていくのにはどうすべきかと、考えたりする事が少しの手掛りになることもある。また同僚が、子どもと遊んでいるその時の様子を見て、「あっ『フーガ』だ！」と感ずることもある。ここでは、ある時期を過ごす子どもの経過を「フーガ」的に追ってみたいと思う。

さて、「フーガ」ということだが、「トッカータとフーガ・ニ短調」「フーガの技法」等、「フーガ」という題名のついた曲もあるが、「フーガ」とは、〃ひとつの主題が各声部あるいは各楽器に定期的な規則的な模倣反復を行いつつ、特定な調的法則を守って成る楽曲である。すなわち、声楽合唱曲あるいは器楽合奏曲や管弦楽曲であり、あるいは、声楽と器楽を合わせた楽曲ともなるのであり、あらゆる対位法的技法を含んで展開するが、調的にはひとつの調を基盤にして、それの近親調がその原調を修飾しながら、大きな調的終止形を形成するものである〃（音楽辞典　一九七七　音楽之友社）

例えば



これは、有名なバッハによる「フーガの技法」の始めのテーマである。これが旋律的にもリズム的にみても様々に変形されて現われてくるのだが、基本的な輪郭は失われることなく、自由に音楽的に展開していくのである。

ところで、ここに登場するA君のことについて少し述べておきたいと思う。

A君は、三才児として私達の所へ入園し、入園当初は、表情はニコニコとしていて良いのだが、母親や人に興味なく一人で動き廻り鉄砲玉の様でもあった。又本人にとって気にくわない事があると、自ら頭を物や床にぶつけたり、体全体で跳びはねて時に痛々しさも感じられる程であった。特に保育者がA君にとって良いと思って誘いをかけた事でも、ことごとく頭をぶつける行為として返ってきた。時には、名前を呼んだだけでも、その様な動きをすることがあった。A君は泣いたりする時の発声はあるけれども、発語はない。けれども表情が良いので、とかく大人は言葉で働きかけがちになり、機嫌をそこねることが多かったようだ。

このA君との経過を、「フーガ」の旋律的要素である〃主題〃〃応答〃〃対主題〃を用いて追っていきたいと思

う。

一曲目

『主題』―ニコニコしてよく遊ぶ

けれどもそれは、保育者や母親、まして他の子どもに興味を示さず一人で動き廻っている。特にA君は、簀の子の上を行ったり来たり、その上をとびはねたり、又たとえ、すべり台がぬれて登りにくくても、すべり台を下から登って上まで行き、登った時の格好のまま降りるという事を繰り返している。そして、水溜まりや、水場では足で水をはねかせて、声を出して遊んでいる。

『応答』―A君と距離を置いて見守る

私が一緒にすべり台に登ろうとして、A君との距離を近づけたりすると、私を手で押しのけたり、声を掛けたりすると自ら頭を床に叩きつけたりする、又A君が登園する前に私がすべり台の踊り場で迎えようとすると、すべり台に登ってこなかったり、表情をくずすので、私は地上でA君を見守ることがほとんどである。ただ私はA君と距離を置いて動かざるを得ないことが多いが、A君が場所を離れた後私自身、同じ遊び（動き方）をして、彼の気持ちに近づいてみたいとも思う。

『対主題』―初めてのトランポリン

退園時刻直前、トランポリンによりかかってそれを手で叩いている。そして右足をへりに掛けようと何度も上げるのだが届かない。近くでそれを見ていた私は、A君ひとりではとても無理なので少し手伝ってトランポリンの上に彼を乗せた。全くぎごちないが、大変ニコニコして跳び続けた。

二曲目

『主題』―母親を呼ぶ

登園してすぐ、すべり台に登り踊り場を往復している。この頃は下から名前を呼ぶと、振り返ったりする。又トランポリンによく乗るがその時には私は彼に手を引かれる。動いている時は、ニコニコしているのだが理由

が判らず泣き出すことがでてくる。私は慰めるつもりでA君を抱く。それ自体は拒否されない。少しすると落ち着き、自ら降りる。遊び出すのかなと思うと地面に泣き伏してしまう。私達にはA君がどうして泣くのか理由が見つからなかった。

『応答』―母親に入室してもらう

ひょっとしたら母親を彼は必要としているのではないかと思う。そう感じた翌日、風邪気味ということもあり、A君の視界から母親が見えなくなると泣き出した。母親を呼ぶと彼は母親に抱きつきその腕の中でシクシクやっている。そこで、母親にA君が自分から遊び出す迄、一緒に過してもらうよう伝える。母親は心よく受けてくれる。

『対主題』―何が何でもお母さん

比較的早い時間で落ち着くと母親の手を取りトランポリンへ行く。母親の手を取りながら、トランポリンを跳ぶ。だんだん上手になったこともあって少し跳び過ぎてころび、口を少し切って泣くとすぐに、母親の所へ行く。その他、遊びの移動の時も母親の手をとり、私や他の保育者には目もくれないが、母親といる時はニコニコとしている。

三曲目

『主題』―母親にベッタリくっついている

時に一人ですべり台に登りに行くこともあるが、母親を絶えず見ている様子で、それ以外は母親にベッタリ抱きついている事が多い。

『応答』―母親とゆっくり過す

私達は、A君が当初母親に全く関心を示さずに動きまわっていたところ、やっと母親を意識し始めた様子なので、じっくり母親の元で過す事を勧める。母親は積極的に受けて下さり、A君のペースに合わせ過ごす。

『対主題』―母親から少し離れることもある

例えば、午前中母親にベッタリ抱かれていると、その後、自ら降りて動き出す。しかし他児に邪魔されたり、何か気に入らない事があると、確実に母親の元に行く。

四曲目

『主題』―母親と一緒に遊ぶ

よく母親の手を引きトランポリンへ行き、トランポリンに乗せてもらって母親の手を取りながら跳んだり、母親に抱かれながら跳ぶ。母親から離れることもあるが、よく母親の方を見ている。側に、私や他の保育者がいても必ず母親の手を引く。時に、母親が他児に手を引かれてA君の視界から消えると激しく泣き出す。

『応答』―母親と私がA君を見守る

他児がA君の母親の手を引きにきても、私や他の保育者がその子の相手をするという事で、母親にはA君だけを見て、いつでもA君が呼びに来ても応えられるようにしてもらう。

『対主題』―ちょっと母親に用事

ほとんど玩具を持って遊ぶということがなかったが、プラレールを持ったり、風船をいじったりする。

ある時、すべり台の踊り場で一緒に下を見ていたが、すべり台を例の如く後ろ向きに降りていった。いつもの様に私は戻ってくるだろうと待っていたが戻って来ないので、私もすべり台を降りて部屋に入った。すると母親がA君に水をのませ終っていたところだった。〃A君が部屋に入ってくるなり、母親の手を取り、水場に引っぱって行った〃ということだった。A君は水を飲むと一人で再び外へ出て行った。

又母親の手も引くが、母親と一緒に私や他の保育者の手も引くことがみられるようになる。

五曲目

『主題』―母親が自分が動きまわる空間にいれば、視界に入らなくても私や他の保育者と一緒に遊ぶ。

母親との距離が離れ、時に登園時、私が座って手を広げて名前を呼ぶと私の腕の中に飛び込んでくる。そして私の手を取り、トランポリンをする。一人で遊んでいる時も近くで見守っていると、よく私の方を見て笑いかけてくる。

『応答』―母親は、いる

母親には、まだ母親を確認する為にA君が戻ってくることがあるかもしれないので、同じ場所に止まっていてもらうようにする。私の方は、他児の事は他の保育者に全てまかせて、いつでもA君の要求に応えられる様、側にいる。そして一人で遊んでいる時でも、よく私の方を見たり、笑ったりする事があるのでその時は必ず笑いかける。

『対主題』―ちょっと母親確認

一番母親から遠い裏庭へ行き、すべり台やコンクリートドラムの上に乗って踊ったり、色々な方向を見ている。そこで私と葉っぱのやりとりをしたりする。時に私が玩具を見せて足元に置く。以前だと、すぐぐずったり激しく泣いたりしたが、それらを受け取ったり、足で押し出したりしている。ある時、唐突的にその場を離れたので、どうしたのかなと思い後を付いて行く。すると母親が見える所まで行って、母親の方をチラッと見て再び元の場所へ戻って来た。又時には、他児に遊びを邪魔されてぐずるが、側にいる私に抱かれにきたりもする。しばらく私の腕の中で抱かれていると自分から降りてニコニコして遊び出す。

六曲目

『主題』―A君が遊びまわる空間に母親がいなくても、私や他の保育者と遊ぶ。

登園時、母親に抱かれて来るが私が手を広げて迎えると、すぐ母親から私の方へ体を預けて抱かれにくる。私に抱かれながら、私の顔を見て笑ったり、両手で私の胸を叩いて声を出して笑ったりする。しばらく抱かれた後自分から降り、一人ですべり台に登りに行ったり、私の手を引いて裏庭へ行ったりする。そして私の手を引かない時でも、時々後ろを振り返って見たり、笑いかける。今迄、一人で動きまわっていたすべり台、トランポリン、水場でも私を意識している。例えば、裏庭のすべり台の上で私の方を見ている。大きな木の葉が風に揺れて時々私の方も彼の視界から消えてしまう。すると、A君

は体を様々にずらして、私の方を何度も見る。退園時まで、母親を探す様子は全く見られず、私には、A君と一緒に過している、という実感が強く感じられた。ある時、たまたま私の所から少し離れてA君は水遊びをしていた。その時、他児が私の所に抱っこをされに来た。私がその子を抱くのを見て、A君は私の所へ寄ってきて、その子の腕を何度も引いた。

『応答』―母親は待合室へ

もう私や他の保育者と一緒に過ごせるようになったので、母親には他の母親達と同様、待合室で退園時までいてもらうことにする。私の方は、母親にベッタリしなくなったので私の方にベッタリしてくる可能性も考えて、いつでも応えられるようにする。確かに、A君との距離が近くなり、抱っこやおんぶが多くなる。私の方も一つの事を長時間していると体が痛くなるので、肩車をしたり、抱き方を変えてみたりする。

『対主題』―他児への関心も？　いつもニコニコして遊ぶ。

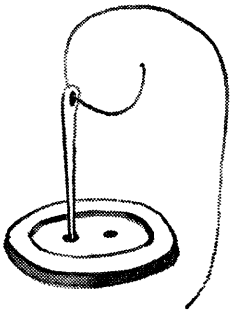
私に抱かれてトランポリンをすることが多く、私が疲れてA君を降ろそうとすると、泣きはしないが足をバタつかせる。私があきらめて、むしろ積極的に付き合うと、声を出して笑い、そのうち自ら降りていく。そして今度は、他児がすでに遊んでいるシャワー室へ自分から入っていき、水をはねかせながら、他児とジョーロを取られたり、取ったりしている。それでもニコニコしている。またA君に興味がある六才の女の子が、A君を抱こうとしたり、構おうとしても、笑うだけでくずれることはない。私や他の保育者との距離も近くなったが、他児との距離もずっと近くなってくる。ある時、私が、土の山に水を入れようと穴を掘っていた。一応掘り終ったのでスコップを置くと、それを見ていたA君は口では表現しないが、もっと掘れという様に私が置いたスコップを取り上げ私に渡す。私はもう少し穴を掘った。A君は、発語はなくても、要求を上手に示すことができるようになり、確実に人とのつながりの中で動けるようになっていっている事を私は確信した。

おわりに

一曲、一曲の過した時間の長さは異なるし、それぞれの時期のテーマも少しずつ異なっているが、A君が成長しているという一つの大きな流れの中で、各テーマが次第に変化し、発展していっているのではないだろうか。

とは言っても、子どもの成長は同じ方向、角度、質をもって進むとは限らない。

しかし、私がA君と過した後を振り返る時、すぐ「フーガ」としてのイメージが湧いてきた。つまり、私も、A君も、心はそれぞれ独自性を持って動いているが、A君は、誰からのものではない〝テーマ〟を自ら示し、必然的に保育者である私達がそれに応え、またそれにA君が応えていく。この様子は、私にとって、まさに「フーガ」であった。

A君と私や、他の保育者達とが、良い「フーガ」の曲を楽しく演奏できたのであろうか、私にもっと良い応答ができたのなら、もっともっと素晴らしい対主題から、次の主題へと、A君は発展させていったのではないだろうか。等々、振り返りつつ、これからのA君の過し方についても、一つの手掛りとして、より良い「フーガ」の曲を創り上げるには、私達がどう具体的に応答したらよいか、考えていくであろう。また、一つの保育発展の手掛りとしても。

（愛育養護学校幼稚部）